狂言に現れる場所と移動
その２．中・遠距離の移動

坂場順子

一般科

Places and Changes of Places in Kyôgen Comedic Theatre
Part II: Middle to Long-Distance Travels

Junko SAKABA

Abstract

The actors of the Kyôgen comedic theatre perform in an empty space of the Noh theatre. They almost never use stage sets; props are also minimal. Using dialogues and the actors' movement, Kyôgen has developed simple and efficient ways to indicate places. Kyôgen characters, which range from masters, their servants, husbands and wives, to priests and merchants, go around places in their daily space, or make short trips, or sometimes travel considerable distances. In Part II of the treatise, we will examine middle to long-distance travels. They cover a vaiety of locations and character types much more so than observed in Part I, illuminating further the kinds of life the medieval Japanese, mostly common people, led.

Keywords: Kyôgen, empty space, places, middle to long-distance travels, common people, the Muromachi period

１．序

日本の古典演劇である狂言は、能楽の番組の中で能の曲にはさまれて上演されるのが定例である。能は、上演時間が平均して９０分から２時間におよぶが、狂言は一曲が短い曲で１５分程度、長い曲でもせいぜい５０分程度であり、平均すると３０分前後になる。前論考でも述べたが、狂言では能舞台の本舞台・橋掛かりに舞台装置らしきものは通常何も置かれない。基本的に狂言も能も「何もない空間」で演じられるのである。特に狂言では徹底していて、セット（作り物と呼ばれる）を全くと言っていいほど使用しない。このように、上演時間も短く、舞台空間にセットらしきものがほとんどない、狂言の舞台表現を支えるのは、狂言の演技であり、舞台空間をどのように活用するかの工夫と言える。

この論考では、前回に続いて狂言に現れる場所と移動を考察する。前回は、その１として狂言の舞台表現における日常生活の場所について分析した。今回の論考ではその２として、中・遠距離の移動を考察する。

中・遠距離の移動のうち、中距離については前論考の後半部で述べた。それには、使いや買い物で中距離の場所へ出かける場合が挙げられる。太郎冠者が主人に買い物を頼まれて都に出かけたり（『末広かり』など）、田舎者が仏堂に納める仏像を作る仏師を探しに上洛する（『仏師』など）場合など、都方面への買い物が中心だが、その他さまざまな場所も現れる。

また主人が新参者を抱えるというので、太郎冠者がふさわしい人物を物色しに海道筋に出かけるのも似通った中距離移動と言えよう。また、人探しという点で共通するのが、地獄の閻魔大王が六道辻で亡者を待ち、無理やり地獄に引っ張っていこうとする趣向の曲である（『朝比奈』など）。

中・遠距離の移動は、この他に旅僧が諸国行脚・諸国修行の旅の途中であったり（『双六』など）、羽黒山の山伏が大峯・葛城での修行を終え帰郷する場

合（『禰宜山伏』など）のように宗教者の旅がある。また都での訴訟を終え、帰郷する大名（江戸時代の大名ではなく、中世の財産のある武士階級）もいれば（『入間川』など）、里帰りする一人旅の女（『痩松』など）も描かれている。

さらに狂言では、やや遠距離の旅が推測される曲がある。例えば、中世の社会制度を描いた、年貢を納めるために上洛する百姓たちや（『佐渡狐』、旅商人の姿も描かれている（『昆布売』など）。

中・遠距離の移動で殊に多くの曲に見られるのが、物見遊山（『二千石』など）と、寺社への参詣・願掛けである（『鞍馬参』など）。中世の人々（狂言では、都市部の人間が多い）にとって、物見遊山は貴重な娯楽だったに違いない。従者である太郎冠者が主人に無断で遊びに行って帰って来たところで主人に叱られる趣向の曲や、狩りに出る遊山、毎年恒例の年籠り、妻を乞う願掛けなど種々多岐に渡る。狂言の描き方を見ると、これら寺社への参詣も楽しみのひとつであったことが伺える。

こうした狂言の人物の移動は、もちろん全て徒歩である。宗教者や商人など職業柄、旅中にあることが日常である場合もあるが、中世の日本では、旅をすること自体が多大な努力を要し、物騒なことも珍しくない危険なものであったろう。狂言は、こうした中世の人々の旅を、一方で写実的に、他方ではなごやかに、おおらかに描いている。狂言から見えてくるのは、中世の時空間と庶民の生活ばかりではなく、その時代に生きることの現実を受け止め、観客を楽しませる舞台表現へと昇華していった舞台芸人たちの根性である。

この論考では、前回に続き、『狂言を楽しむ』（平凡社カラー新書　No.33）に挙げられている総現行曲263 曲について、登場人物の中・遠距離移動という観点から和泉流を主軸に分析する。

2．買い物などの用事

「狂言に現れる場所と移動　その1」で紹介した『末広かり』のように、従者である太郎冠者が主人に用事を言いつけられ、都やその近辺に出かける曲は、狂言の人気曲である。『末広かり』では、太郎冠者は主人に「末広がり」、つまり扇を求めてこいと仰せつかる。まず太郎冠者は都へ向けて道行し、都へ着く。「末広がり」が何なのか知らないので「末広がり買おう、末広がり買いす」と商人風に大声で歩き回る。結局、都のすっぱ（人を騙る者）に末広がりの代わりに古い傘をつかまされて帰ってくる。同趣向の曲に『宝の笠』（大蔵流では『隠笠』）があるが、この曲では、太郎冠者が主人の命で当節流行の宝くらべに出すための宝を求めに都に行き、すっぱに騙される。昔、鎮西八郎為朝が鬼ヶ島から持ち帰った宝の隠れ笠だと称する古笠をつかまされるのである。『宝の槌』も同様の内容である。

また『粟田口』では、この頃あちこちで流行している道具くらべに粟田口の刀が入用になった大名が、太郎冠者を都に遣る。太郎冠者は、「自分こそ粟田口だ」というすっぱを連れて帰る。大名自身、粟田口が刀のことと知らず、能書きに照らし合わせてすっぱに問うと、すっぱは、はきはきと調子よく答えるので大名はすっかり上機嫌になる。太郎冠者の都への道行、帰りの道行はいずれも本舞台を時計回りに一巡するパターンが基本である。中・遠距離ほど舞台を巡る曲線が大きく、町中など、より狭い空間に入ると道行の曲線は半分くらいになる（図1．参照）。

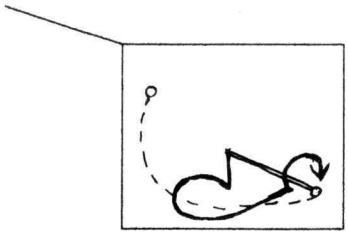


図1．都の通りに入ってからの太郎冠者の道行（実線部分）

同様の趣向の曲はこれら以外にも、『張蛸』（饗応の引き出物として、張太鼓の代わりに張蛸）、『目近』、（正月の饗応の引き出物として、特殊な扇の目近・込骨の代わりに古扇）、『鎧腹巻』（鎧腹巻きくらべで鎧の代わりに鎧に関する能書きの反故）、『若和布』（丹波の国能勢郡の寺の住持が寺の修復落成祝いに新発意を都に遣り、酒の肴の若和布の代わりに、すっぱが買っておいた女を連れ帰る）などがある。無知がゆえにとんちんかんな物を買ってくるという状況がいくつもの曲で使われていて、この趣向がいかに人気があったかがわかる。

この他、買い物の類で場所の移動が見られる曲には、主従物では『蝸牛』、『鐘の音』、『空腕』などがある。『蝸牛』では、主人の祖父の長寿の薬に蝸牛（かたつむり）を取って来いと命じられた太郎冠者は、藪の中で仮眠を取っている山伏を発見、かたつむりと勘違いしてしまう。『鐘の音』では、「金の値」と「鐘の音」を勘違いした太郎冠者が鎌倉の寺々を廻り、さまざまな鐘の音を聞いてきて主人に報告する。『空腕』では、臆病なくせに空腕立て（勇気があることをうそぶくこと）する太郎冠者を懲らしめるために、主人が鯉を求めてこいと夕暮れ方に冠者を淀へ行かせる。途中太郎冠者は物影におびえる。主人はあとをつけてきて、太郎冠者が預かった主人の太刀を差し出すのを取り上げる。

都に買い物に出かけるのは、太郎冠者ばかりではない。『仏師』では、持仏堂を建立した田舎者が本尊を求めて上洛し、仏師を探して町を歩き回る。すっぱは、容易に騙せる相手と見て自分こそ真の仏師、真仏師（まぶつし）だと名乗り、本尊を作り明日にでも引き渡そうという。すっぱは、自ら本尊に扮して田舎者を騙そうとするが、田舎者は仏像のあちらこちらが気に入らず、直させているうちに混乱したすっぱは結局見破られてしまう（図２．参照）。『仏師』と同様の曲に『六地蔵』がある。また田舎者を扱う曲として、『小傘（こがらかさ）』では、在所の人々が寄り合い堂を建立したので堂守を探しに海道へでる。

この他、『金津地蔵（かなつじぞう）』では、自分の子供を地蔵に仕立てて金津の男に売りつけた男や、『不腹立（はらたてず）』（大蔵流は『腹不立』）で在所の施主二人が海道に出て住持を探していたところ、決して腹を立てないとうそぶく諸国行脚の僧に会うなど、趣向が少しばかり異なる曲もある。

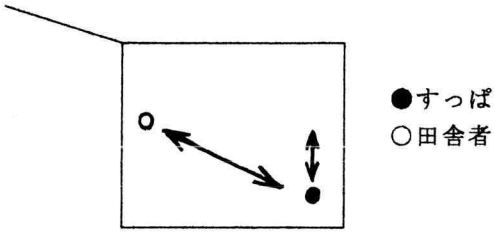


図２．仏像をめぐるすっぱと田舎者の移動

３．人を探す旅

狂言には、人を探しに中距離移動する状況がある。その中で代表的なのが、新参者（狂言の場合は、新しい従者）を探しに太郎冠者が海道へ出る場合と、亡者を強制的に地獄へ連れて行こうと閻魔大王自らが六道の辻に出かける場合である。前者の場合は、太郎冠者とその主人は海道筋にあまり遠くないところに住んでいると思われる。つまり、中距離の移動である。後者の場合は、本拠地の地獄から六道へという異次元の移動であるが、曲の雰囲気としてはそれほど遠い印象を受けない。能と違って狂言における魔界の存在は、閻魔大王とても弱さも愚かさもあるので、異次元という無限の距離を感じさせないからかも知れない。

３．１．新参者を探しに海道へ

狂言には、主人が新参者（新しい従者）を抱えたいというので、太郎冠者がふさわしい人物を探しに海道筋辺りまで出かける曲が数曲ある。基本の筋立ては同じなのだが、新参者の正体がいろいろで、曲の興趣も異なり、いずれも人気曲となっている。

空間の移動は、まず太郎冠者が海道に出る道行、候補者の登場・道行、二人の出会い（太郎冠者が声をかける）、そして二人しての帰路の道行となる（図３～５．参照）。

新しい従者を抱えたいという主人は大名（広い土地を所有する中世の有力者・武士階級）であるが、狂言の大名は現在のところ太郎冠者一人しか従者がいない。はじめは八千人（大蔵流は三千人）も抱えようと大言壮語するが、結局一人だけ新参者を抱えることになる。

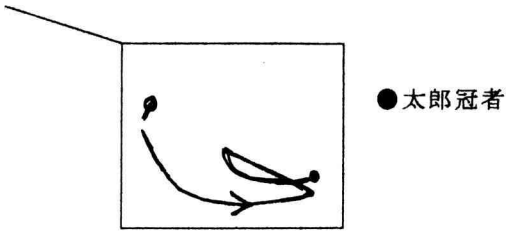


図３．太郎冠者の海道筋への道行

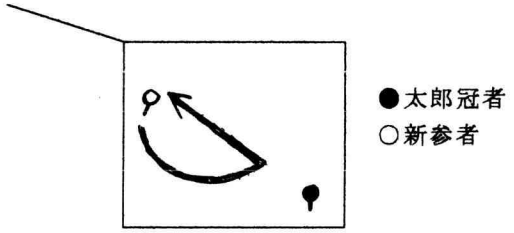


図４．新参者の道行

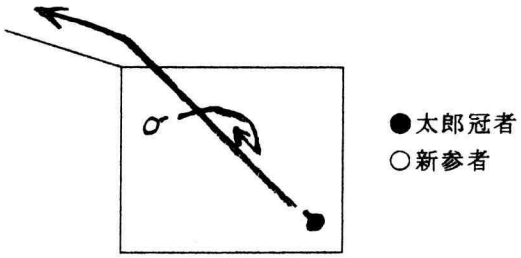


図５．太郎冠者と新参者の帰路の道行
（新参者は、太郎冠者のあとにつく）

大名にとって新参者は、なにか特技がなければならない。大名といっても、それほど裕福でもなさそうな狂言の大名のこと、自分を楽しませてくれたり、役に立つことを教えてくれたりする従者が欲しいのである。『今参（いままいり）』では、太郎冠者が海道に出ると、奉公の望みを持つ板東方の者に出会う。大名は、当時流行っていた秀句（頓知を効かせた韻律詩）が好きなので、太郎冠者は板東方の者に大名が気に入るような秀句をあらかじめ教えておく。『秀句傘』で

は、会合で皆が笑うのが秀句らしいので、自分も秀句を習いたくなった大名が秀句が上手な新参者を抱えることにする。しかし新参者は、大名の秀句の問いかけがわからない。『人を馬』では、新参者の得意技は人を馬に変えることだという。これは太郎冠者が新参者と共謀して大名を騙そうと計画したのだった。

この他、新参者の特技が相撲である場合が３曲ある。相撲には相手がいる。結局大名自らが相手になるが、それぞれの曲で相撲の展開に工夫がこらされている。『蚊相撲』では、奉公の望みを持つ者は蚊の精である。都に上り、人間の血を吸おうという科白があるから、新参者を探しに出た太郎冠者は逆に都から海道筋に下っていったと考えられる。新参者の得意な技が相撲と聞いて、大名は蚊の精を相手にに相撲を取り始める。似たような趣向の曲に『鼻取相撲』と『文相撲』があるが、前者は新参者の得意技が鼻を取る相撲、後者もやはり相撲が得意技で、大名は相撲の書を引きながら新参者と相撲を取る。

３．２．亡者を求めて六道辻に出る閻魔大王

閻魔大王が登場し、近頃娑婆で仏教が流行って人間がいろいろな宗旨に帰依するので、亡者がなかなか地獄に落ちてくれないと嘆く。地獄の飢饉状態を切り抜けるため、閻魔自ら六道の辻に出て（道行）亡者を無理やり地獄に引っ張って行こうとする。結局、かわりに極楽に案内する（道行）はめになる。

ここでの橋掛かりは、異なる世界をつなぐ、まさに橋の役目をする。閻魔大王にとっては地獄から六道辻、亡者にとっては娑婆世界と冥土を結ぶ道、また六道と極楽を結ぶ道にも変化する。

『朝比奈』では、亡者は朝比奈三郎義秀（和泉流派、三郎何某）という戦の強者である。閻魔は亡者を責めようとするが、いっこうに動じないのであきらめる。有名な和田の戦の起こりを尋ねると、朝比奈は、その様子を実演を交えて仕方話で語る。その戦で相手をころりころりと投げ飛ばした段になると、閻魔もころりころりと投げ飛ばされる。結局、朝比奈を極楽にまで案内するはめになる。

『政頼』と『博奕十王』では、閻魔は鬼たちを引き連れてにぎやかに六道に出かける。政頼は、平安中期の鷹匠の名人であり、閻魔や鬼たちと鷹狩りをしてその褒美に三年間娑婆に戻ることを許される。『博奕十王』では、博奕の上手が六道にさしかかり、閻魔や鬼たちに博奕を教えることになる。閻魔たちはすっかり博奕がおもしろくなるが、博奕打にはかなわず、持ち物から着ているものまで皆取られてしまう。最後は、結局博奕打ちを浄土へ案内することになる。

『馬口労』の亡者は、馬を売買したり労役に使う者で、『八尾』は河内の国八尾の里のもの。閻魔と稚児関係にあった八尾地蔵から、閻魔宛に浄土に送ってとの状を携えている。

狂言における閻魔大王や地獄の鬼は、恐ろしげなのだが何かにつけ挫折してしまう「人間味」を持っているのが特徴である。地獄・辻道といった異界も能空間で明るく表現される。

５．年貢を納めに上洛する百姓たち

中世の日本では、年に一回、地方のめずらしい産物を都に滞在する領主に届けに上がる慣習があった。もっぱら儀礼的な訪問で、お祝儀としての意味合いが強く、江戸時代などの税としての年貢とは異なる意味を持っていた。

狂言では、丹波や加賀、津の国などの百姓が上洛し、上頭にそれぞれの国らしい年貢を納める。途中異なる国の百姓が出逢い、お互い同じ目的で上洛する途中だとわかると同道して、共に上頭に会う。『三人夫』意外は二人の百姓が道連れとなる。そして最後は、折節の歌会にちなんでめでたい歌を詠むという趣向が大半を占める。

舞台上の基本のパターンは、まずアド（第二番目に主要な役柄）のお百姓（狂言では、お百姓と呼ぶ）が名乗り、道行してワキ座に着き、次にシテ（主要な役柄）のお百姓が登場する。アドはワキ座でシテに声を掛け、同道することになる。二人は橋掛かりまで行き、本舞台の方を見て都に着いたことを確認し合う。このように百姓物の狂言では、橋掛かりを使ってかなり遠距離の移動を示す工夫が為されている。

年貢を納めるお百姓を扱った曲の中で、最も上演回数の多いのが『佐渡狐』である。曲の内容にひねりがあり、ただめでたさに終わらない。つまり、越後の国の百姓と佐渡の百姓とが道連れになり、途中佐渡に狐がいるかいないかの口論になるのである。荒唐無稽な争いなのだが、二人の百姓は大まじめである。その対比がおもしろさにつながっている。お百姓は、御館の奏者に判定してもらうことにするが、佐渡の百姓は奏者に賄賂をつかい、自分の味方になってもらう。しかし何しろ佐渡の百姓は狐を見たことがないので、最後にはぼろが出てしまう。

この他に百姓物として曲名だけを挙げると、『勝栗』、『雁厂金』（大蔵流では『鴈雁金』）、『昆布柿』、『三人夫』、『筑紫の奥』、『松　楪』、『餅酒』、そして『弓矢』（和泉流のみ）である。

６．宗教者の旅

狂言に登場する宗教者は、主に仏教に帰依した旅僧と修験者である。仏教では、ほとんどが阿弥陀仏を信仰する浄土僧だが、『宗論』のように浄土僧に

対抗する法華僧が登場する場合もある。基本的には、能に登場する旅僧と同じ類の人物として設定されているが、それには二種類ある。ひとつは、能のように霊魂と交信する能力を持つ旅僧の場合であるが、ただ霊魂は蟬や蛸、尺八吹き、お茶を点て死にした茶の師匠など特異である。他の曲では、旅僧は、人間らしい愚かさと弱さを持つ者として描かれている。

一方山伏は、羽黒山出身で、大峯・葛城での修行帰りという設定が多い。能にも修験者が登場するが、狂言の山伏はもっぱら祈祷力不足の、頼りない修験者であることが多い（例外は『蝸牛』における山伏）。

この他に、禰宜や神子が登場する曲も若干数あるが、これらの人物では場所の移動はない。

6．1．旅僧

狂言における旅僧は、能と同様に諸国行脚・諸国修行の途中であり、遠距離の旅人である。その中で7曲が舞狂言と呼ばれている。旅の途中、旅僧はいわくありげな卒塔婆や何らかの印を見つける。里の者の説明を受け、旅僧が霊を供養すると霊が現れる、という流れになっている。

舞狂言は、『双六』、『蟬』、『蛸』、『通円』、『野老』、『祐善』、『楽阿弥』の7曲で、そのうち『蛸』と『祐善』は二場構成の複式夢幻能の形を取る。舞狂言の旅僧の旅は、それぞれが特定の場所への移動である。それは、歴史上知られた場所だったり、海辺なら海の物、山辺なら山の物と、場所にふさわしい、風変わりな霊が登場する設定になっている。

旅僧の道行は、名乗座から常の道行をし、常座に行く。ここで目的地に着いた旨述べ、次に正先を見て変わって物体（印）を発見する。それは、松にかかった尺八だったり（『楽阿弥』）、卒塔婆だったり（『通円』）、曲ごとにさまざまである。

『双六』では、俗人の頃双六打ちだった近江の国甲賀郡の僧が、九郎蔵という双六の名人を訪ねて関東へ下る。関寺に着くと九郎蔵を弔った塔婆が立っている。『蟬』では、諸国行脚の僧が善光寺参詣の途中、上松の里で蟬の霊に出会う。『蛸』では、日向の国の僧が都一見の旅の途中、播磨の国清水の浦で蛸の霊に出会う。『通円』では宇治平等院参詣の旅僧たちが茶屋に立ち寄り、昔、通円という茶屋坊主が宇治橋供養の折、茶を点てて点て死にしたことを知る。『野老』では、奥丹波の僧が都一見の途中、能勢の郡でいわくありげな卒塔婆に気がつく。里の者から、昨年の春、大きな野老（山芋）を掘り出して食べたのち、野老の執心が毎夜現れるようになったと聞き、野老の霊を供養する。

『祐善』では、若狭の国轆轤谷の僧（もと傘張り）が都一見の旅に出て、氏神である笠取明神参詣途中、京都五条油小路で祐善の亡霊に出会う。祐善は生前、傘張り上手で、張り死にしたのだった。『楽阿弥』では、伊勢大神宮参詣途中の旅僧が、伊勢の国別保の松原に着き、松に多くの尺八が下がっているのに気がつく。里の者は、昔ここに住んでいた楽阿弥という尺八吹きが吹き死にしたのだという。

舞狂言以外で旅僧が登場する曲でも、旅の経路がきわめて具体的な場合が多い。これは、狂言の旅僧物が能を真似て設定されていることもあるが、模倣に終わらず、さまざまな土地に掛けておかしみを表現している。

『薩摩守』では、住吉・天王寺参詣を志す出家が茶屋に立ち寄る。茶屋の主人は、出家が一文無しだと知って、神崎の渡しをただで乗る方法を教える。渡し守が秀句（洒落た物言い）好きなので、まず「平家の公達」と言って、「その心は？」と聞かれたら、「薩摩守忠度」と答えるようにと。『宗論』では、身延山から京都へ向かう法華僧と、善光寺から下向する浄土僧が道連れになる。お互いの宗派を知ると、法華僧の方が一緒になるのを避けて先に宿を取るが、浄土僧は無理やり相部屋にする。

『名取川』では、比叡山で受戒した遙か遠国の僧は物忘れがひどいので二つ名前をもらい、それぞれを袖に書いてもらう。大河に出て徒歩で渡り始めるが、名前を書いた墨が流れてしまう。一生懸命名前を探すが、この川が名取川と聞いて納得する（図6～8参照）。この他、『呂連』では諸国修行の僧が日暮れ、路傍の家に宿を乞う。『鬼丸』では、西国方の僧が東国行脚の途中、伊勢の国鈴鹿山で宿を乞う。帰ってきた宿の老人の甥は山賊。このように、狂言における旅僧の空間は、能より多岐に渡り、中世の庶民の生活の中に紛れ込んでいく。

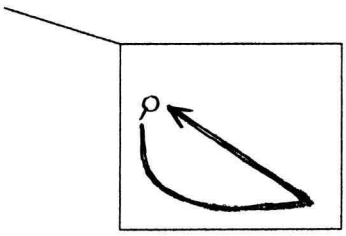
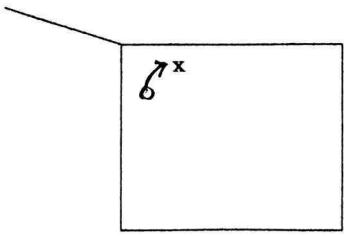


図6．比叡山から名取川へ（常の道行）



x 太鼓前

図7．川を見て、渡り瀬へ移動

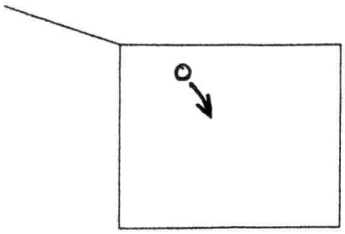


図８．川の中に入る

６．２．山伏

印を結び呪文を唱えボオロン、ボオロンと祈っておおげさな加持祈祷を行い、効力を誇示するが、悲修無学の実体をさらけだす。多くが大峯・葛城での修行を終え、出羽の国羽黒山へ帰る途中の修験僧だが、『茸』（大蔵流では『菌』）と『梟山伏』（大蔵流では『梟』）のみは近隣に住む。

山伏は、一足一足太股を垂直に上げ、山をかけ、峰を渡る体を表す。山伏の道行は、遠いところから歩いてくる設定になっており、橋掛かりから本舞台の名乗座までがその道程である。名乗りが終わると、能の形式に基づいて「次第」という謡を謡う。これまでの道程を説明し、これからの道程を宣言するもので、通常、「大峰かけて葛城や。大峰かけて葛城や。我が本山に帰らん」とう能謡である。ここで本山とは、羽黒山のことを言う。この時、山伏は斜め後ろを向き、観客に背中を向ける能の形を取る（図９参照）。

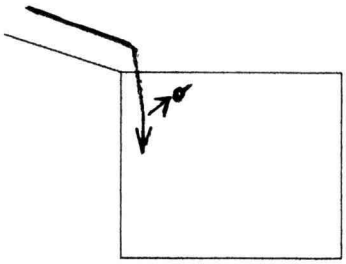


図９．山伏の道行きと次第。

『犬山伏』では、このあたりの出家が茶屋で休んでいると、山伏が立ち寄る。難癖をつけ、出家に晩まで肩箱を持って行けとえらぶるが、茶屋の主人が人喰い犬を祈り伏せた方が相手に荷物を持たせることにしては、と提案する。そして出家にだけ「トラ」という犬の名前を教える。『犬山伏』の類曲に『禰宜山伏』があるが、ここでは葛城帰りの山伏が茶屋で休んでいる伊勢の御師（大蔵流は伊勢の禰宜）に難癖をつける。茶屋の主人の提案は、守り神の大黒天を影向させた方が相手に荷物を持たせるというもの。

旅の途中の山伏は、旅の疲れで休憩していることがある。前述の『蝸牛』では、長旅に疲れた山伏が藪に入って横になっている。『苞山伏』では、山人が山へ薪を取りに行く途中道端で寝ているところに、山伏がこれも長旅の疲れで山人の脇に横になる。そこに使いの者が来て山人の苞を取り、中の飯を食べてしまう。使いの者が山伏を犯人だと言い張るので山伏は祈祷をする。この曲ではめずらしく山伏の祈祷が効いて、使いの者は身体がしびれて動けなくなる。『柿山伏』では、羽黒山へ戻る途中の山伏が柿の木を見つける。折からのどが乾いていたので、柿の木に登り柿をむさぼり食うが、柿主の百姓に見つけられてしまう。

この他、祈祷の効力を誇示する山伏が祈祷に失敗する曲として『蟹山伏』、『茸』（大蔵流では『菌』）『腰祈』、『梟山伏』（大蔵流では『梟』）がある。この中には、人気曲も多い。

『蟹山伏』では、臆病な山伏が強力を連れて羽黒山へ帰国途中、江州蟹ヶ澤で蟹の精に出会う。蟹の精だと知って元気を取り戻すが、強力が蟹のはさみに挟まれてしまう。山伏が祈り伏せようとするが、自分まで挟まれてしまう。『茸』では、屋敷内に異様なきのこがたくさん生えて困った何某が近所の山伏にきのこ退治を頼む。『腰祈』では、修行から帰った出羽の国羽黒山の山伏が祖父を訪ね、曲がった腰を治して上げようとするが、ちょうどいい具合の曲がり具合にならない。『梟山伏』では、このあたりの者の弟太郎が山から帰ってから様子がおかしいので近隣の山伏に加持を頼む。山伏は、何某の弟が梟の巣をおろしたため梟が憑いたからだと言い、祈祷を始めるが、兄にも憑いて、最後には自分にも憑いてしまう。

７．帰郷する大名

室町時代は戦乱に明け暮れた時代であり、とくに後期は、群雄割拠の時代であった。各所の戦に勝った側は、その恩賞として土地を分割して与えられることが多かった。その過程では、土地の再分割・所有地の調整なども含まれ、もともと自分の土地だったところが所有権が混乱する場合や、功績に見合わない配分を受け、不満を持つ「大名」たちが多くいた。

狂言には、そのような大名を扱った曲が数多くある。彼らは訴訟を起こし、室町幕府の所在地である京都に滞在し、訴訟の経過を待った。滞在は、かなりの長期に渡ることも多かったらしい。狂言では、めでたく訴訟が有利に落着（解決）した場合のみを扱い、久しぶりに国に帰れることになった大名とその従者である太郎冠者を描いている。

狂言が取り扱う帰郷する大名には、帰郷前の出来事を扱う曲と、大名と太郎冠者の帰郷の旅を扱う曲に別れる。前者の方が数多く、『麻生』、『鬼瓦』、『雁

大名』（大蔵流は『雁盗人』）、『墨塗』である。『麻生』では、信濃の国の住人麻生の何某が長々の在京ののち、訴訟も有利に落着し、明日元旦に帰郷の旅に着くことにする。帰国用の服装を整えるために従者二人を町に遣る。折から正月の注連を飾った家並みが続いているので迷ってしまうが、松囃子の時期だからと、二人はにぎやかに囃子物（リズミカルな小謡と「浮キ」という足の上下）を囃して自分たちの居場所を教える。『鬼瓦』では、遠国の大名が訴訟も有利に片づき、帰郷の前に太郎冠者と日頃信仰する因幡道の薬師へお礼参りに出かける。すると破風の鬼瓦が妻の顔にそっくりだったので帰郷心を募らせるが、最後は二人して晴れやかに笑い、めでたく納める。

『雁大名』（大蔵流は『雁盗人』）では、訴訟も片づいた大名が、在京中お世話になった人を招待するため太郎冠者に肴を買いに遣る。太郎冠者は初雁を見つけるが、金子を忘れていたので戻ると、大名はお金がない。二人して策略し、店で喧嘩をして、そのどさくさに紛れて雁を盗んでくることにする。大名は関東方言でしゃべり、窮迫していた中世の武家の姿をリアルに現している。『墨塗』では、領地の訴訟も有利に片づいた大名が、帰郷前、在京中になじんだ女のところへ暇乞いに行く。女は鬢水入れの水を目につけて泣く真似をする。太郎冠者がその水を墨と替えると、女の顔は真っ黒になってしまう。

大名の出身地は、はるか遠国であったり、特定の国が設定されていたりする。大体にして、越前・信濃・関東が中心であり、地方の武士階級の姿がほうふつとされる。この論考の主題である「場所と場所の移動」からみると、実際に帰郷の旅にある大名が出てくる曲では、かなり遠距離の旅を描いている。

『入間川』では、東国の大名がめでたく訴訟に勝ち、領地を安堵される。帰郷の旅についた大名と太郎冠者は、東海道を下っていったのであろう、途中富士山などを眺め、関東に入って大きな川に出る（図１０参照）。里の者に聞くと入間川であることがわかる。今の埼玉県を流れる川である。この付近は、昔から朝鮮半島からの帰化人が多く定住していて、一風変わった言葉遣いや慣習があることで知られていた。『入間川』の大名は、里の住人に川の渡瀬を尋ねる。里の住人が入間の何某であると聞いて、大名はこの地方には入間様と言って、何事も意味合いを逆に言う逆言葉があったことを思い出す。浅いを深い、深いを浅いと解釈して深みにはまり、ずぶぬれになってしまうのである（図１１参照）。

『鏡男』では、越後の国松の山家の者が長々の在京の後、訴訟が片づいて故郷に戻ることになった。帰路で鏡屋から妻への土産に鏡を買う（大蔵は、在京中に買う）。帰宅すると、鏡というものを見たことがない妻は、鏡に映った自分の顔を見て鏡の中に知らぬ女がいると思い、在京中に抱えた女だろうと夫を責める。

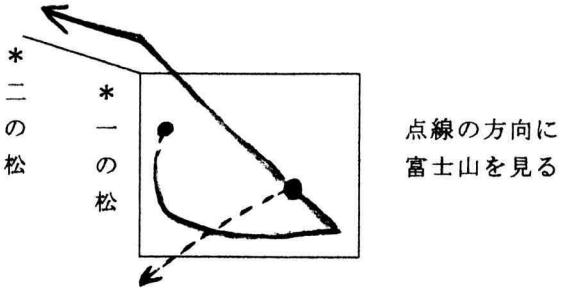


図１０．大名と太郎冠者の道行
（途中、富士山を見る）

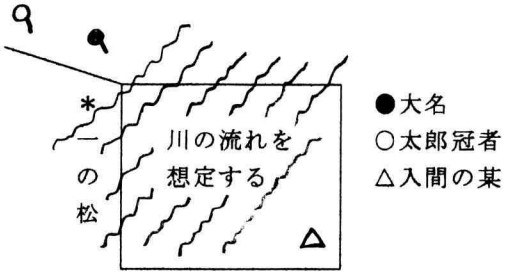


図１１．入間川をはさんで立つ

８．里帰りの女

中世の日本では、女が一人で旅するのは基本的にまれなことで、芸人や宗教者といった職業の者に限られていた。女の旅を取り上げる狂言の曲は３曲のみで、すべて里帰りを扱っている。

『金藤左衛門』（大蔵流のみ）では、雲の上の金藤左衛門という山賊が長刀を持って上の山で獲物を待っているところに里帰りの女が通りかかる。山賊は、お上から山賊として盗みを働いてよいという許し状をもらっている、と許し状を見せ、女が持っていた袋を奪う。中には、小袖・かもじ・鏡・紅・帯などがあり、女房の土産によいと山賊が喜んでいるすきに、女は山賊の長刀を取って逆に山賊をおどす。

『若市』では、門前の若市が親里へ行く途中、寺の住持に止められる。住持は若市が花を携えているのを見て、それは寺から盗んだものだろうと花を奪い取る。怒った若市は門前の尼たちを集めて寺に押し寄せる。

『痩松』（現行は和泉流のみ）では、丹波の国の山賊が痩松というところで獲物を待っている。このあたりでは、山賊ことばで実入りがいいことを肥松、わるいことを痩松と言うが、痩松が地名になったのだ。里帰りの女がそこを通りかかる。この後の展開は、『金藤左衛門』と同じである。和泉流では、近年『痩松』がたびたび演じられている。狂言では、「わわしい女」といって、登場する女はしっかり自

己主張する場合が多いが、この曲は女が言葉ではなく、行動でたくましさを見せる点でまれな曲である。あと一曲、『髭櫓』でも妻が近所の女共と語らい、夫をやっつける。

9．旅商人たち

数は少ないが、狂言には旅商人も登場する。それぞれ人気曲で、中世の旅商人たちの姿が活き活きと描かれている。旅商人は、さまざまな土地から旅してくる。土地の名産品を運ぶ者（『昆布売』）、市が立つので近隣からやってくる者（『鍋八撥』）などである。

『膏薬煉』では、上方と鎌倉の膏薬煉がそれぞれ膏薬煉りの名人と自負し、同業者と競争しようと旅に出て、途中で出会う。膏薬は、現代でいう湿布薬のようなものである。それぞれ系図や秘伝を自慢するが勝負が決まらない。最後に、どちらの膏薬の方が吸着力があるかの競い合いになり、鼻に膏薬をつけた紙を貼り、互いを吸い付けようとする。

『昆布売』では、このあたりの者が外出して、誰かに自分の太刀を持たせようと通りがかりの者を待っている。そこに若狭の小浜の昆布売りがやって来て、無理やり太刀を持たせられる。『酢薑』では、津の国の薑売り（薑とは新ショウガのこと）が都に商いに来ていて、一休みしているところに和泉の堺の酢売りが通りかかる。薑売りは、自分は商人司だから酢は売らせないと言い張り、二人ともそれぞれの系図を競うが勝負が決まらない。次に秀句で勝ち負けを決めようとするが決まらないので、最後は暇乞いの一句を言い合って笑って別れる。

『鍋八撥』では、新市に一の店についた者に特権が与えられるというので、鞨鼓売りが夜中から来て一の店で一寝入りする。そこにわさ鍋売りの男が来て、鞨鼓売りの脇に寝て先着を装う。次の朝、両者が喧嘩を始めたので、目代が間に入ってどちらが一の店を飾るのにふさわしいか競争させる。

10．物見遊山

狂言には、登場人物が物見遊山に出かける曲が非常に多く、中世人にとって中距離旅行がこの上もない気晴らしであり、代表的娯楽であったことが伺える。

10．1．太郎冠者の無断外出

狂言の代表的な人物類型である太郎冠者は、外出の自由が許されない身ではあるが、主人の目を盗んで遊びに出かけてしまう。ただし曲中、太郎冠者が実際に遊びに行く経過は描かない。つまり、道行の部分は曲にはない。これらの曲は、太郎冠者が帰宅したところを主人が叱る場面から始まる。主人は、太郎冠者がどこへ行って何をしてきたか興味津々なので、太郎冠者に報告させるところが曲の眼目点になっている。

『二千石』では太郎冠者は、忍んで京内参りをしてきて昨晩に戻ってきた。主人が叱りに太郎冠者の家に出かけると、冠者は京で流行っている謡を習ってきたと主人に聞かせる。『太子手鉾』でも太郎冠者は忍んで京内参りをして来て、二三日主人に報告せずにいる。太郎冠者は、報告が遅れたのは家の雨漏りがひどかったので、と言い訳をする。主人は、一旦太郎冠者を許すが、日頃太郎冠者から聞いている太子の手鉾とはどういうものか尋ねる。これは、槍を竹の先に結んだものを「もりやをとめる」と太郎冠者が洒落て、雨漏りを止めるおまじないに使っているだけなのだが、太郎冠者はおもしろおかしく説明する。『竹生嶋参』（和泉流のみ）では、太郎冠者は無断で竹生嶋参りをしてきた。主人が怒って訪ねてきたが、竹生嶋参りと聞いて太郎冠者を許し、竹生嶋参りでなにか珍しいことはなかったかと尋ねる。太郎冠者は、あることないこと地口としゃれで報告する。『富士松』では、太郎冠者は富士詣でをしてきた。やはり主人は太郎冠者を許し、富士山から取って来た富士松を庭木にほしいと所望するが、太郎冠者は承知しない。主人が機嫌を損ねたので、太郎冠者はふつうの酒を富士の神酒だと偽って主人に飲ませる。主人は連歌の付合いをして買ったら松を貰うと提案する。『文蔵』では、太郎冠者は無断で京内参りをし、途中、主人の伯父御様宅に立ち寄って珍しいものを御馳走になった。主人は、太郎冠者にその名前を思い出させようと苦心惨憺する。

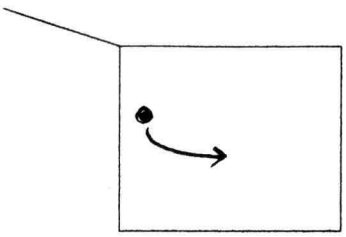


図１２．太郎冠者、祇園内に入る

『菊の花』（大蔵流は『茫々頭』）では太郎冠者は、主人に仕方話（身振りを交えた説明）で京内参りを報告する。北野天神から祇園に行く途中、途中咲いていた菊の大輪を頭に挿して歩いているところを上臈に呼びかけられてそのまま祇園の野遊びの場に行き（図１２参照）、履脱ぎの近くに座って呼ばれるのを待っていた。いつまで経っても呼びに来ないので帰ろうと歩き始めたが、下女が追ってきて、「返

せ」と後ろから強く腕をねじ上げる。仕方なく、懐から緒太の金剛を返した、とう報告である。つまり、太郎冠者は緒太の金剛を盗もうとした、というわけである。

１０．２．野山へ狙い物に出かける

遊山の外出の中で、数曲が狩猟に出かける上京を扱っている。弓矢を持ち、太郎冠者と出かける狩猟は野遊び・狙い物と呼ばれ、一部の有産階級の娯楽であった。

『靱猿』では、土地の訴訟があって在京していると思われる大名が太郎冠者を連れて狙い物に行く途中、猿引きに出会う。猿引きが連れている猿がいい毛並みをしているので、靱の皮にしたいから猿を貸せと要求する。猿引きが断ると弓をつがえて脅して、無理やり承知させる。靱に猿の皮を使うということは、猿を殺すことになる。猿引きは、毛並みを傷つけず、一打ちに殺せる場所があると調教杖を振り上げると猿は芸の合図と思い、いろいろ芸を始める。大名は、この様子に心を打たれ猿を許してやる。

『雁礫』（大蔵流は『鴈礫』）では、野遊びに出かけた大名が弓矢で雁を射ようとするが、通りかかった使いの者が礫で先に仕留めてしまう。大名は弓で仕留めたのだと主張し、喧嘩になったところに仲裁人が入る。大名が弓矢が下手だと見抜いた仲裁人は、死んだ雁を弓矢でもう一度射当てたら大名のものとしようと提案するが、大名の矢は死んだ雁にも当たらない。『禁野』では、大名が一人で禁野に鳥を狙いに行く。連れがいないので通りかかった使いの者を弓矢で脅して無理やり連れにする。禁野に着くと、使いの者には雁が見えるが、大名は言われてもどこかわからない。使いの者は、自分が射ると大名から弓矢を受け取り、その弓矢で逆に大名を脅す。『左近三郎』（大蔵流のみ）では、左近三郎という者が狩りに出る途中、出家に出会い無理やり連れにする。三郎は、いろいろな質問をして出家をなぶるが悪意はない。狩猟をして殺生をする三郎と、殺生を禁じる禅宗の出家の取り合わせだが、最後には仲良くなり家に連れていく。『若菜』では、果報者が同朋のかい阿弥と八瀬・大原あたりに小鳥を狙いに出かけ、楽しんでいるところに、大原女たちが頭に柴をかざしてやって来る。やがて酒宴が始まる。

１０．３．その他の物見遊山

以上の他、一般的な物見遊山の類を扱った狂言は数多い。中距離の遊山の外出が、中世の人々にとって人気のある楽しみ方であったことが伺える。ここでは、遊山の曲と出かけた場所を見てみよう。

『歌　争』（大蔵流は『土　筆』）では、何某が知り合いの何某を誘って、野辺へ出かける。『右流左止』では、西国に隠れもない塩飽の藤造が諸国の名所旧跡を訪れる旅の途中、明石の浦に立ち寄る。『おひやし』では、このあたりの者があまりに暑いので、太郎冠者と参詣かたがた東山の清水へ涼みに行く。清水の手水場から本堂へ行き、さらに滝のあるところへ行く。『見物左衛門』（和泉流三宅派番外）は、めずらしく登場人物が一人だけの曲で、このあたりに住む見物左衛門という人物が賀茂の競馬・深草祭りに出かける。『木実争』（大蔵流は『菓争』）には、茄子の精や橘の精など植物の精の二つのグループが登場し、吉野山へ花見に行く途中、道連れになる。『猿座頭』（大蔵流のみ）では、勾当とその妻が清水に花見に出かけたところに、猿引が通りかかり、勾当の妻と逃げてしまう。後には勾当と猿が残される。『磁石』では、遠江の国見付の郷の者が上方見物に出かけ、途中大津松本の市を見物しているところへ人買いが言葉巧みに近づき、石山の観世音参詣にこと寄せて人買いを斡旋する宿に連れていく。『月見座頭』では、下京辺の座頭が野辺へ出て月見の夜の風情を楽しんでいるところに上京の者が来て二人で酒を飲み交わし、古歌を引いて楽しむ。帰り際、上京の者はいたずら心を起こし、座頭を突き倒して去っていく。『飛越』では、このあたりの者が茶の湯に招かれて出かけて行く途中、いつもの飛越という川にさしかかる。『二人大名』では、野遊びに出た二人の大名が自分たちの太刀を誰かに持たせようと、通りがかりの使いの者を引き留め、無理やり太刀を持たせるが後に逆に太刀で脅される羽目になる。『老武者』では、曽我の里の三位と稚児が鎌倉見物の途中、藤沢の宿場に入ると、美しい稚児が来ていると聞いてまず若衆たちが訪ねてくる。次に祖父（老人）が稚児の盃をいただこうとやって来るが若衆たちは祖父を追いやる。後に若衆たちと祖父たちの争いになる。

１１．寺社への参詣

数多くの狂言には、さまざまな願掛けや、年中行事として寺社へ参詣する登場人物が描かれている。中世の庶民が願っていたことや、寺社の参詣に楽しみを見いだしていた様子が活き活きと描かれている。

１１．１．妻乞いなどの願掛けへ

狂言には、清水の観世音に妻乞いを祈願する曲が４曲ある。『伊文字』、『清水座頭』、『二九十八』、そして『吹取』である。それぞれ観世音に参籠して霊夢を得る。中でも『清水座頭』は、めずらしく目の見えない者同志の出会いを扱っている。３年前に盲目になった瞽女と座頭が伴侶を得たいと清水に参籠する。参籠の堂でお互い知り合いになり、酒を飲み交わす。その夜、それぞれ西の門に行けば相手に巡り会えるとの霊夢を授かり、将来の夫婦として改め

て出会う。二人の杖と杖が触れあって、昨夜知り合った相手が観世音が定めた伴侶だと知るのである。

『伊文字』では、このあたりの者が太郎冠者と清水の観世音に出かけ、やはり西門で女に出会う。女は、自分の居所を示唆する古歌を詠んで立ち去ってしまう。上の句しか覚えておらず、その場所に歌の関所を張り、使いの者を止めて下の句を継がせる。やっと歌がつながり、主従は使いの者と名残を惜しむ。『二九十八』では、このあたりの者が同じように西門で被衣（かずき）をかぶった女と出会うが、家に連れ帰って被衣を取るととんでもない醜女（しこめ）だったことがわかる。『吹取』では、観世音のお告げは月夜に五条橋で笛を吹き、現れた女が妻になるとのことで、笛の吹けない男は知人に頼んで笛を吹いてもらうが、現れた女は笛を吹いた方の男にすり寄ってしまう。結局、女が醜女であったので男達はお互いに女を押しつけようとする。

『釣針（つりばり）』では、このあたりの者が太郎冠者を連れて妻乞いに出かける。行き先は西の宮の夷（えびす）さまである。夷さまは豊漁の福神であるので、その霊夢お告げも、西門に置いてある釣針で欲しいものを釣れ、というものである。まず主人の奥様が釣れ、次に腰元数人がぞろぞろと釣れる。最後に太郎冠者の妻を釣ると、被衣をかぶった女が連れる。太郎冠者は、主人と奥様が祝言のために奥に入った後、自分の妻の被衣を取ると醜女だったので驚いて逃げる。

『川上』は、十年前盲目になった大和の国吉野の男が、川上の地蔵が霊験あらたかと聞いて参籠しに出かける。霊夢を見るが、地蔵のお告げは、男が今連れ添っている妻とは悪縁なので離縁すれば再び目が見えるようになるというものだった。男の目は開き、喜んで帰路につくが、心配して迎えに来た妻と途中で会う。地蔵のお告げを伝えると妻は腹を立てる。男が離縁をあきらめると、また前のどんみりとした目に戻ってしまう。二人は前世の因果とあきらめ、手に手を取って帰って行く。

１１．２．その他の参詣

この他、狂言には年中行事やら様々な理由で寺社に参詣する曲が数多くある。何か理由をつけて外出するのを楽しむ中世の人々の姿が見えてくる。狂言の舞台もこうした参詣にかこつけて、それぞれの曲の趣向を凝らしている。

年中行事として多いのが鞍馬の初寅参りである。鞍馬は、京都左京区にあり、鞍馬弘教の本山だ。本尊は毘沙門で、皇城の北方を鎮護する寺として栄えた。初寅とは、正月最初の寅の日で、毘沙門に参詣する風習がある。

『鞍馬参（まいり）』では、主人と太郎冠者が鞍馬の初寅参りに出かけ、主人は太郎冠者に不寝番を命じる。冠者があまりたびたび主人を起こすので、仕方なく寝かせると太郎冠者は夢で多聞天から福ありの実を授かる。帰り道、主人は福ありの実を自分のものにしようとするので太郎冠者は十分なぶってから主人にあげる。

『鈍根草（どんごんそう）』では、主人と太郎冠者が鞍馬参りに出かけ、まず神前で礼拝し、いつものとおり宿坊に立ち寄る。そこで酒の肴として茗荷がでる。二人は鈍根草と利根草のいわれについて言い合いをする。

『成上り』では、主人と太郎冠者が鞍馬の初寅参りをする。太郎冠者は、主人の太刀を預かっていたが、参籠している間にすっぱに青竹とすり替えられてしまう。帰り道、太郎冠者はさまざまな物が違う物に成り上がる話をし、太刀が青竹に成り上がったと言い訳をする。

『鳴子遣子（なるこやるこ）』では、参詣人二人が鞍馬の寅の日参りに行く。途中、一人が山田に群鳥を追う鳴子が掛けてあると言うと、もう一方はそれは鳴子ではなくて遣子というのだと口論になり、御菩薩いけの地蔵の前の茶屋の主人に判定を頼む。『毘沙門』では、木幡の者二人が初寅の日、鞍馬の毘沙門天に参詣する。通夜で参籠していると毘沙門天が出現する。『毘沙門連歌』では、このあたりの者二人が鞍馬の初寅参りに出かけるが、『毘沙門』と同様に毘沙門天が出現する。

鞍馬の初寅参りの他に、玉津島明神に参詣する曲が２つある。『歌仙』と『業平餅』である。玉津島は歌枕でもあり、和歌山県和歌浦にある。かつては島で、和歌三神の一つである玉津島神社がある。『歌仙』では、大果報の者が従者二人を釣れて玉津島明神へ参詣した折り、六歌仙の絵馬を奉納すると絵馬から六歌仙が出てくる。『業平餅』では、和歌で有名な平安時代の歌人在原業平が供ぞろえもにぎやかに玉津島明神に参詣する途中、餅屋で休憩する。餅を所望して、貴人に似合わずむしゃむしゃと夢中で食べる。餅屋に代金を請求されるが、業平はお金を持っていない。

この他『太刀奪（たちばい）』では、このあたりの者が北野のお手水の会へ行く途中の出来事、『筒竹筒（つつさきえ）』では大和の国の酒屋が河内の国の酒屋と八幡宮に行く途中道連れになり、二人の前に八幡宮に仕える鳩の神が出現する。『萩大名』では、訴訟が片づいた遠国の大名が気晴らしの遊山に清水の観世音にお礼参りする。かたがた坂に知り合いの茶屋があり、太郎冠者の提案で、そこの萩が見頃なので亭主の好きな和歌を詠んで庭を見せてもらうことにする。和歌の嗜みのない大名がとんちんかんな応対をするので亭主はすっかり腹を立てる。『鉢叩（はちたたき）』では、都に住む鉢叩き僧が朋輩と北野神社へ参詣する。北野神社の末社の瓢の神は鉢叩きの氏神だから皆で鉢を叩いて念仏和讃をする。すると瓢（あくべ）の神が現れる。『福の神』では、このあたりの者二人が、出雲の大社で例年の年

籠りにでかける。豆まきをしていると福の神が出現する。『瓢の神』（和泉流のみ）では、寺内の太郎は茶筅売りだが茶筅が売れないので、守護神の松尾の大明神に暇乞いの参籠をする。すると松尾の末社の瓢の神が出現する。『舟ふな』では、主人と太郎冠者が西の宮へ参詣途中、神崎の渡しで太郎冠者は「舟」のことを「ふな」と言い、主人は「ふね」というのだと口論になる。

１２．中・遠距離の移動――まとめ

以上、さまざまな中・遠距離の移動の例を見てきたが、そのほとんどが、ある人物類型が発端を作り、ある類似状況下にあるという移動であった。舞台上の移動のパターンも、『入間川』などを除いて各曲にほぼ共通である。

移動先は、海道筋であったり、上洛の場合など都近辺が多いが、旅僧・山伏・旅商人・お百姓の場合は多くが遠距離移動であり、出発点と到着点が具体的な地名で示されることが通常である。

物見遊山は、太郎冠者の都などへの抜参りを除けば都近辺のさまざまな地域に渡る。都の中心部を離れ、近隣の野辺に遊ぶことがほとんどだ。中でも、狙い物、つまり狩りを目的とした移動がことのほか多いのが目立つ。人気の類型人物である大名が登場するのが理由の一つと考えられるが、一方に当時の流行の一つとして狙い物があったとも考えられよう。

多くの大名は「遙か遠国」と、名乗りで示すだけの場合と、『入間川』のように遠く東国のどこかに下っていく様子が描かれる。当時の武士階級が日本の遠い土地土地に住まい、また多くの武士が京に滞在していた社会状況が生々しく提示されているといえる。

寺社の参詣は、鞍馬・清水が人気の場所で、他に玉津島や西宮が続くが、皆近畿地方に集中している。伊勢参りがセリフで言及されていることもあるが（『素袍落』）、実際には描写されない。

狂言にはこの他にも、曲に特有の場所の移動を描く曲も多い。この論考に続く「狂言に現れる場所と移動　その３．異次元の場所、場所の表現の演劇的効果」では、特徴ある場所の移動を分析・論考する予定である。

参考文献

小林責『狂言をたのしむ（平凡社カラー新書　３３）』平凡社、１９７６．
小山弘志『岩波講座　能・狂言 VII ,狂言鑑賞案内』岩波書店、１９９０．
野々村戒三、安藤常次郎共編『狂言集成』東京春陽堂、１９３１．
林屋辰三郎『京都（岩波新書　Ｄ９５）』岩波書店、１９６２．
古川久、小林責、荻原達子編『狂言事典　事項篇』東京堂出版、１９７６．
松村明編『大辞林』三省堂、１９８９．
柳田國夫監修、財団法人民俗学研究所編『民俗学事典』東京堂出版、１９９４．